

平成20年2月15日発行

発行者

社団法人 新潟県植物防疫協会

〒951-8133

新潟市中央区川岸町三丁目21番地3

☎ 025 (233) 2839

FAX 025 (233) 8018

平成19農薬年度 水稻農薬出荷実績

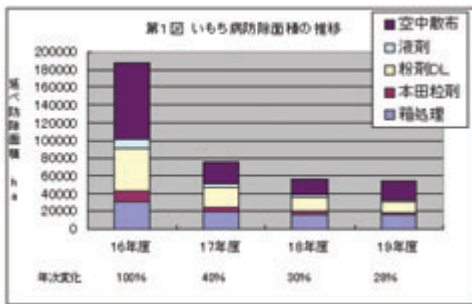
平成19農薬年度（H.18.10～H.19.9）の本会の出荷実績をもとに防除面積を算出しました。

箱処理剤も含めた水稻の延べ防除面積は198,000haであり、16年比56.6%、17年比90.8%、18年比99.0%となりました。16年のコシヒカリBL導入前と比較すると、延べ防除面積は半減しました。導入後はわずかに減少傾向となっています。

1. 用途別の出荷実績

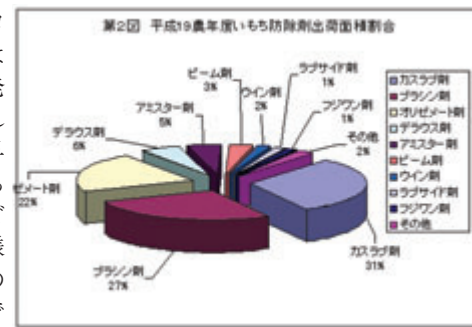
① いもち病薬剤の推移

本年度のいもち病防除面積は54,200ha、16年比28.9%、17年比71.7%、18年比95.9%となり、コシヒカリBL全県一斉導入3年目を迎え、防除面積は導入前と比較し1/3以下に減少しました。その後も減少していますが、下げ止まりつつあるようです。



薬剤別に比較すると、カスラブ剤、ブラシン剤、オリゼメート剤が全体の80%を占め、いもち防除の主力剤となっています。

本年も、コシヒカリではいもち病の発生が抑えられましたが、早生品種・もち品種酒米などは従来と同様にいもち病の防除が必要です。病害の発生に注意し、的確な防除を行うことが重要です。



② 紋枯病薬剤の推移

本年度の紋枯病防除面積は27,000ha、16年比55.3%、17年比113.7%、18年比94.8%となり、16年と比較すると半減しましたが、それ以降は変動があるもののほぼ横ばいで推移しています。

③ 本田害虫防除剤の推移

本年度の害虫防除面積は159,561ha、16年比70.7%、17年比87.7%、18年比100.3%となり、16年から減少傾向にありましたが、本年は前年とほぼ同程度でした。

本田の害虫防除の中心はカメムシであり、使用薬剤は従来のMR.ジョーカーやスミチオン剤からスタークル剤へ移行しています。

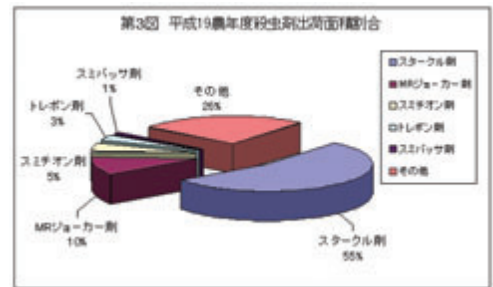
《主な内容》

平成19農薬年度 水稻農薬出荷実績……………	1
研究最前線フェロモントラップを利用した斑点米カメムシ発生消長の把握…	2
イネ墨黒穂病について……………	3
平成19年に新潟県で初確認された害虫の被害情報…	4
特別寄稿 農薬の理解促進のために……………	5
平成19年度農薬実証ほの概要について……………	6

スタークル剤の防除面積は86,387haで全体の半分を占めます。前年比102.9%、16年と比較すると10倍以上と著しい伸びを示しており、現在カメムシ防除主力剤はスタークル剤と言えます。

2. 剤型別の出荷実績

剤型別に比較すると、粉剤は32,264ha、前年比81.1%で年々減少しています。逆に箱処理剤は45,229haで前年比101.9%、本田粒剤は25,630haで前年比119.1%、液剤は11,838haで前年比121.6%と年々増加しています。



防除方法全体の構成割合として、箱処理剤は16年以降防除面積が減少するなか、年々微増しています。本田散布剤は、粒剤が増加傾向、粉剤が減少傾向にあり、液剤はほぼ横ばいでした。

空中散布剤に分類される大型規格の液剤（空中散布剤）の防除面積は、83,659haで前年比101.0%となっております。19年度から航空防除は廃止となりましたが、無人ヘリ等への切替により防除面積は前年と同程度でした。空中散布剤は防除面積全体の約半数を占めており、16年以降ほぼ横ばいで推移しています。

3. 今後の防除の動向

ポジティブリスト制の施行にとともない、粉剤から粒剤など飛散しにくい剤型へ移行がすすむとともに、比較的安価な液剤の需要が増える傾向にあります。また航空防除の廃止や本田防除の減少にとともない、その省力性から箱処理剤がますます増えていくと思われます。

今後いもち防除剤では、平成21年にフサライド原体（ラブサイド剤、ブラシン剤など）の製造が終了することにより、薬剤の大幅変更が必要になってきます。

これらの剤の動向に加えて、IPM（総合的病害虫管理）資材を取り入れた防除や減々栽培の拡大など、栽培形態は多様化しており、それぞれの形態に対応した防除を生産者のみでなく関係機関や地域ぐるみで行っていくことが重要であると考えます。

（全農新潟県本部 肥料農薬総合課 伊藤あき子）

研究最前線

合成性フェロモントラップを利用した アカヒゲホソミドリカスミカメ発生消長の把握

中央農業総合研究センター北陸研究センター 斑点米カメムシ研究チーム 樋口博也

斑点米カメムシであるアカヒゲホソミドリカスミカメ（写真1）は、イネの籾より吸汁を行い斑点米を発生させ、米の品質を著しく低下させます。1970年代から80年代まで、本種は北海道でのみ斑点米の原因種として問題視されてきました。しかし、1990年代中頃から東北・北陸地域で本種の発生が顕在化し、同地域における斑点米カメムシの主要種となっています。本種の発生予察や防除技術を開発するためには、野外での発生状況を明らかにすることが極めて重要です。特に、斑点米被害が発生する水田での発生消長の把握は不可欠です。



写真1 アカヒゲホソミドリカスミカメ成虫

本種雌は、性フェロモンを放出し雄を誘引します。また、性フェロモンの成分も明らかにされ、合成することが可能となり、本種の発生消長の把握に合成性フェロモンを誘引源としたトラップが利用できる可能性が示唆されました。そこで平成16年から新潟県、富山県、山形県、長野県の試験研究機関、信越化学工業、北陸研究センターが共同で合成性フェロモントラップを利用したアカヒゲホソミドリカスミカメの発生予察技術の開発に取り組みました。ここではその研究の一端を紹介します。

フェロモントラップの発生消長把握における有効性を評価するためには、その誘殺消長が圃場での発生消長を的確

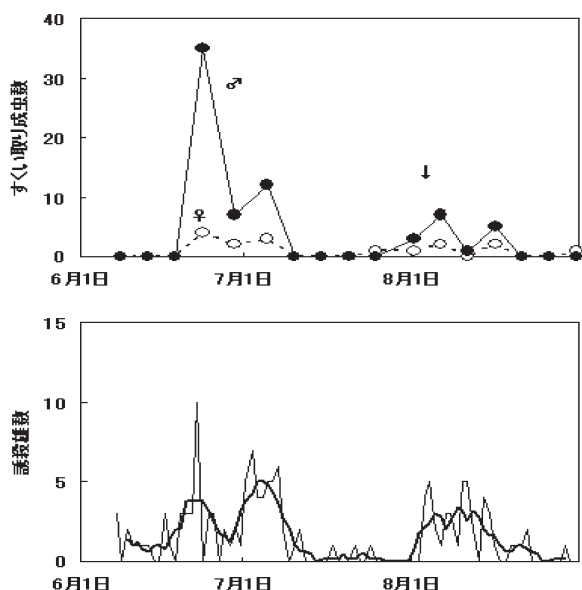
に捉えているか否かを明らかにする必要があります。本種の水田における発生消長の調査法としては捕虫網によるすくい取りが有効であることが明らかにされています。そこで、水田内に設置したフェロモントラップ（写真2）の誘殺消長とすくい取りによる個体数の消長を比較した例が第1図です。調査は2005年に行い、イネの品種は「コシヒカリ」、トラップは粘着トラップを使用し、トラップの設置高はイネの草冠高としています。



写真2 水田内に設置した粘着トラップ
注) 粘着板上辺中央部に誘引源として合成性フェロモン剤を設置。

すくい取り調査では、6月23日、29日、7月5日に雌雄成虫が捕獲されました（第1図）。さらに、7月25日以降8月中旬まで連続的に捕獲されました。トラップでは7月中旬まで連続的に誘殺があり、8月上旬から再度連続的に誘殺が認められました。トラップの誘殺消長は、すくい取りで認められた雄の消長とよく似たパターンを示しました。

この結果から、水田内に設置したフェロモントラップの誘殺状況は概ね水田での成虫の発生状況を反映していると考えられました。したがって、フェロモントラップがすくい取りの代替え手段として利用できる可能性が示されました。今後は、水田でのフェロモントラップの誘殺数と斑点米率の関係を明らかにし、正確で簡便な発生予察技術の開発に努めたいと考えています。



第1図 水田内におけるアカヒゲホソミドリカスミカメのすくい取り成虫数と粘着トラップに誘殺された雄数の推移

- 注1) 出穂期は8月7日(↓)。
 2) 上図：すくい取り成虫数は捕虫網40回振り。すくい取りは原則として5日間隔で実施。
 3) 下図：トラップの誘殺雄数（細線：日当たり誘殺雄数、太線：5日間移動平均）。

「食の安全安心」

昨年は食をめぐる偽装が相次ぎ、消費者の食に対する安全安心に対する意識が一段と高まった一年であり、農薬の流通に携わっている1人として他人事ではないと感じています。

最近では、消費者の安全安心に対するニーズに対応するために、お米を中心に農薬・化学肥料を減らした減々栽培が増加してきています。必要以上に農薬を使用することは、当然避けなければならないことですが、現場の状況を十分に把握しないまま減々栽培に移行し農産物の品質や収量に悪影響を与え、むしろ逆効果にならないように、事前に十分検討することが必要であると思います。

また、消費者に農薬の役割や安全性について正しく理解をしていただけるために、それぞれの立場でその努力を継続していくことが重要であり、本当の安全安心に繋がっていくと考えています。いずれにしても、前提になるものは農薬の適正使用であり、農薬の流通に携わっている1人として、今後も農薬の適正使用が継続されていくために微力ながら貢献していきたいと考えています。

(株式会社バイタルグリーン 原 孝志)

マイナー病害だけ見過ごせない 最近注目!?! の イネ墨黒穂病について

玄米の品質を低下させる病害は数多く報告されていますが、近年汚粒の原因となるイネ墨黒穂病（図）や稲こうじ病が特に注目されています。これは、平成16年3月より検査基準が明確化され、これらの被害粒は「含まれないこと」とされたことによります。これらによる被害粒では、たくさんの胞子が形成されることから、これが籾摺り時に玄米の表面に付着して外観品質を大きく低下させ、検査で規格外となります。稲こうじ病菌は、発病した籾上に暗緑色の胞子塊を作り、立毛中でも容易に見つけられるので、発生が多い場合には予め刈り分けなどの対策が取れます。イネ墨黒穂病も発病籾に舌状の胞子塊を形成しますが、これは厚膜胞子が多く形成された場合で、少ない場合は籾表面に異常が認められなくとも、籾内に胞子が形成され、玄米は着色米となります（表）。舌状の胞子塊が籾表面に現れたとしても、稲こうじ病の胞子塊に比べて小さいことから、立毛中はよほど多発しなければ気づかない場合が多いと思われます。そのため、籾摺りをはじめて分かるのですが、機械類に厚膜胞子が付着し被害を拡大させてしまいます。収量への影響は極小で、罹病穂全体では登熟歩合や千粒重がわずかに低下する傾向が見られる程度で、統計的に有意な減収は認められていません。また、着色米は粒厚が薄くなるので、1.9mm目の篩で選別すると、そのほとんどが除去できます。



図. イネ墨黒穂病の標徴籾から厚膜胞子（矢印）が溢出している

新潟県では平成7年に全県的に発生が目立ちましたが、これ以外では昭和29年、30年、52～55年、62年～平成2年に稀～小発生が記録されているだけで、被害に関する記録はありません。平成7年の記録では、県内各地で発生が認められましたが、特に中越地区（長岡市、柏崎市、三条市、見附市、刈羽村、旧山古志村、旧下田村など）で多発生し、発病株率90%、発病穂率95%に及んだ激発事例も認められています。

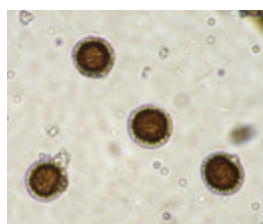
病原菌は *Tilletia barclayana* という担子菌類に属する糸状菌の一種で、ムギ類やトウモロコシなどに発生する黒穂病菌に近縁であることが知られています。罹病籾で産生される黒い粉状のものは厚膜胞子（黒穂胞子、 $\phi 22\sim 32\ \mu\text{m}$ 、1面目写真）で、菌の生存に不適な環境条件下を生き延びるための耐久器官です。厚膜胞子は通常1年以上、貯蔵さ

表. イネ墨黒穂病罹病籾の症状別発生率（本蔵ら、1990による）

症 状	籾 数 (個)	発生率 (%)
舌状に玄米が突出	35	11.8
厚膜胞子は溢出	78	26.4
透過光で黒く見える	92	31.1
無症状	91	30.7
合 計	296	

（補足説明）無症状とは、脱穎して始めて罹病粒と判別できるもので、健全粒ではない。

れた籾のように乾燥条件下にあっては3年以上生存できるとも言われています。厚膜胞子は罹病籾上で産生後、約200日の休眠期間を経て、光、酸素、温度の条件が整った段階で発芽します。そのため伝染環については、罹病籾からはイネ墨黒穂病菌の厚膜胞子場に落下した厚膜胞子が翌年土壌表面で発芽し、前菌糸上に形成された小生子、さらに小生子が飛散・発芽して生じた分生胞子が 開花中のイネに感染すると言われていたのですが、不明な部分が多く、はっきりと分かっていません。しかし、フェリムゾンやプロピコナゾール、シメコナゾールを含む農薬の開花期散布に有効性が報告されていること、逆にこの時期をはずした散布の防除効果が低いことから、他の黒穂病菌と同様に花器感染することは間違いなさそうです。発生好適条件は窒素肥料の多施用、晩生品種や暴風雨後に発生が多いことが報告されています。しかし、本県では早生品種を中心にコシヒカリでも発生すること、平成7年の柏崎市の調査事例では、水害を受けた地域とそうでない地域で発生に差がなかったことから、発生条件ははっきりしないというのが現状のようです。これまでの事例では多発生は突発的で、その翌年は稀～少発生でしたが、農産物検査で規格外となったほ場では、薬剤散布による防除を検討した方が良いでしょう。立毛中に発生が認められた場合は、刈り分けを行って被害を拡大させないようにしましょう。



イネ墨黒穂病菌の厚膜胞子

（作物研究センター 栽培科 黒田 智久）

植防一口メモ

水田におけるSU抵抗性コナギの発生に注意

SU剤とは広葉雑草や多年性雑草に高い除草効果をもつ除草剤成分でスルホニルウレア系の化合物ですが、SU剤が効かないSU剤抵抗性コナギ（以下、抵抗性コナギと言う）が新潟県においても近年確認され始めているので注意が必要です。

コナギだけが異常に多発して残り、生育が進んでいけば、抵抗性の可能性が高いと思われます。このような場合は、コナギ種子の生産を防止して、翌年の発生を抑え、他の圃場への拡散も防止するため、中期剤または後期剤で徹底した防除を行います。この際、抵抗性かどうかを確認すれば次年度の対応が明確となるので、普及指導センターに相談してください。

抵抗性が確認されたら、翌年以降は、抵抗性コナギに効果の高い除草剤を使用します。コナギの種子の寿命は10年以上と長いため、少なくとも数年間は上記の防除対応を行う必要があります。また、一般に抵抗性雑草が発生していても、周辺ほ場で抵抗性雑草が確認された場合は、抵抗性雑草種子がほ場内に入り込む恐れがあるのでSU抵抗性雑草に効果の高い除草剤を使用します。

抵抗性コナギに効く除草剤成分は、クロメプロップやピラゾレート、ベンゾピシクロン、プロモブチド、メフェナセット、ベンゾフェナップ、シメトリンとMCPBの混合剤（中期剤）、ペンタゾン（中期剤や後期剤）、プレチラクトール、ペンチキサゾン等です。

最後に、コナギに限らず抵抗性雑草の発生を予防するため、SU剤を含まない剤あるいは抵抗性雑草に効果のある剤を2～3年毎に使用するなど、除草剤のローテーションを必ず行いましょう。（経営普及課 田村良浩）

防除所通信

平成19年に新潟県で初確認された 害虫の被害情報

今年度に入って新潟県内で、新しい害虫被害が、2つ確認されましたのでご紹介します。

1 イラクサギンウワバの被害初発生

(1) 被害の発見の経緯

8月下旬に園芸研究センター(聖籠町)の施設きゅうりで、葉を食害しているタマナギンウワバに酷似したウワバ類の幼虫が多数確認されました。

幼虫を飼育したところ、8月末に蛹になり、9月6日に羽化した成虫の斑紋からイラクサギンウワバであると判明しました。

9月には、新潟市北区の施設きゅうり、10月には村上市のネギでも幼虫・蛹の発生が確認されました。イラクサギンウワバは日本では古くから分布が知られていましたが、農作物の被害は記録されていませんでした。

しかし平成12年ころから近畿地方で農作物被害がみられるようになり、次第に発生地域が広がり、密度が増加しています。昨年は被害が東北地方の一部まで確認され、新潟県においても発生が確認されたこととなります。

(2) 形態および生態

幼虫はタマナギンウワバに酷似し、老熟幼虫は体長35mm程度。シャクトリ状に歩行します。(写真1)

幼虫は、広範な草本植物を食害し、キャベツ、だいこんなどのアブラナ科、レタス、ごぼう、きくなどのキク科、トマト、ピーマン、なすなどのナス科、にんじん、オクラ、きゅうり、ねぎ等が知られています。特にアブラナ科の加害事例が多く報告されています。



写真1 イラクサギンウワバの幼虫 写真2 イラクサギンウワバの成虫

成虫は前翅長18~19mm。タマナギンウワバやミツモンキンウワバにやや似ていますが、金属光沢部分が少なく、斑紋、色調が異なるので、区別できます。(写真2)

他県では、秋に密度が高まり、晩秋まで発生がみられる傾向が知られています。

2 ミカンキイロアザミウマのかき被害初発生

(1) かき被害の確認

9月に佐渡市の刀根早生1ほ場で、原因不明の果実表皮の障害が発生し、10月初めに佐渡農業普及指導センター、果樹専門技術指導担当を通じ、病虫害防除所へ診断が依頼されました。

アザミウマ類等の食害の可能性があったため、現地ほ場で調査したところ、ミカンキイロアザミウマの寄生を確認しました。

被害症状の出方や寄生状況が和歌山県の事例と一致したため、本種による被害と断定されました。

ミカンキイロアザミウマは、県内の施設野菜・花き類で広く分布していますが、果樹への被害は初確認となりました。

(2) 被害の特徴および虫の寄生状況

被害は、着色期以降に見られるようになります。

被害は果実の着色の進んだ面(陽光面)に多く、茶褐色~黒褐色のかすり状で不正形の傷となります。大きさは数ミリから大きい場合は果実表面の1/4以上に及び、ヤスリでこすった傷のように見え、時に小黑点を伴います。傷は表皮のみで果肉までには及びません。



写真3 ミカンキイロアザミウマのカキ果実表面の被害

被害果のヘタは裏側が食害を受け茶褐色の細かい傷が多く発生し、変色して見える場合が多いようです。

佐渡市の事例では、ミカンキイロアザミウマ成虫は被害果実で、高率に寄生が確認されました。

(新潟県病虫害防除所)

特別
寄稿

農薬の理解促進のために

社団法人日本植物防疫協会 藤田俊一

農薬は農業生産に不可欠であり、適正に使用すれば安全であることは、農薬に携わる関係者なら誰でも知っていることである。しかし農薬関係者以外では、少なからず誤解や偏見が見受けられる。どうやったらもっと理解してもらえるのかは、農薬に携わるおよそ全ての関係者が等しく頭を悩ませてきた課題である。この種の問題はもともと簡単な処方箋では解決できないし、短期間では具体的な成果が見えにくいものであろうが、ここでは今後の取り組みの参考のために、少し異なる視点からの話題を紹介したい。

◆リスクコミュニケーション

まず、ひとくちに農薬に対する理解といっても、農産物の安全性など農薬の基本的なリスクについて議論していく場合と空中散布の是非を議論する場合とでは、論点も説明のやり方も大きく異なる。近年、行政などがしきりにリスクコミュニケーションと称して取り組んでいるものは多くが前者に属するものであり、そこでは「絶対的な安全は存在しない」「科学的な評価をやって許容できる範囲内にリスクを管理することが大切」といった考え方が説明され、実際の評価方法などを具体的に説明することで漠然とした不安を解消してもらおう、といったシナリオが描かれる。この種の取り組みは、ポジ制度の施行を機に各地でずいぶん行われており、消費者に農薬を理解してもらうためのオーソドックスな取り組みと考えられている。農薬業界でもタレントを招くなどして、各地で類似の行事を開いている。こうした活動は、ややもすると自己満足に陥りがちで、一握りの消費者が集会に参加するにすぎないといった批判もあるが、当然地道に続けていくべきである。

◆身内の盲点

農薬のことを理解していないのは実は消費者だけではない。農薬取締法が改正される前年、当協会では全国の植物防疫関係者（その周辺の関係者も含む）約3,000人に緊急アンケートをとったことがあるが、その結果を集計してみると大変驚いた。というのも半数以上の人々が農薬が農産物の安全上問題があると回答してきたからである。ちなみに、農家の健康上の問題については7割が、周辺住民等とのトラブルについては6割が、環境に対しては7割がそれぞれ問題ありと回答してきた。法改正の前であったから現在とは背景が違うが、消費者どころか身近な関係者が農薬に不信感を抱いていることに当時大変衝撃を受けた。冷静に考えてみると、農業関係機関の中で農薬の専門的知識をもっている人たちはむしろ限られており、病害虫関係者ですら例外ではない。あるいは農薬の使用実態のほうに不信感を示したと考えることもできるが、いずれにしてもそれら指導者層はそれぞれの分野では大きな影響力をもつ。そうした人たちにいかに農薬の正しい情報を伝えるのか、まずそのあたりから取り組まないといけないことを当時痛感した。

同じ頃、米国の植物防疫事情をいろいろ調べているうちに、州立大学ではきちんとした教育プログラムがあって、幾つかの素晴らしいテキストにもお目にかかった。単純に

比較できないにしても、考えさせられるところが多かった。さきのアンケートに衝撃を受けていたこともあり、少しでも出来ることはないかと考えた末、当協会の農薬概説という教科書を大幅に改訂した。

◆飛散問題

さて、さきに空中散布の議論などはちょっと違うということを書いたが、こういう問題は農業現場とその周辺で発生する具体的な問題であり、単に農薬の安全性を説いただけでは解決しにくい。同様の問題として、近年公園緑地等住宅地周辺での農薬散布が騒がれるようになっており、一部では無人ヘリなどにも飛び火している。これらに共通しているのは農薬の飛散であり、そこでは具体的な対策が論点になってくる。

これら農薬の飛散に根ざす問題はずっと以前からある。例えば、農薬を浴びて体調をこわしたことが有機栽培を始める動機となった生産者は、次には「自分が体をこわすほど毒なのだから、農薬がかかった農産物が安全な訳がない」と吹聴する。急性毒性と慢性毒性の違いを説いたところで、消費者のほうは農家が自らの体験で言っていることは正しいと信ずる。このようにして有機栽培神話が助長されてきた側面があると思う。ここ数年飛散対策に深く関わった経験からいうと、このへんの問題は他の問題ほど重く受け止めてこなかったのではないかという気がする。農薬の飛散はまず散布者に対して問題なのだが、そんなのは当たり前といった認識がどこか落とし穴になっているように感じる。

これら飛散を理由とした農薬問題には何か具体的な対策が必要である点が悩ましい。中止するのが反対者に最善の結論であるのは当然だが、それでは防除の目的は達せられない。現在、最も難しい対応が求められているのがまさにこの種の問題で、リスクとベネフィットを上手に説明しつつ、何らかの対策（それが気休め程度であったとしても）を用意しながら理解を求めていかない限りうまく解決できない気がする。結局のところ、根本的な解決には、飛散の少ない優れた防除技術を現場に提供していくしかないのだが、近年飛散対策技術に前進がみられているのが明るい材料である。

◆農薬のイメージアップ作戦

農業関係者の中でも、30年前の農薬のイメージで話をする人がいるのに驚くことがある。安全性ばかりでなく施用法の進歩なども説明しながら「最近の農薬はずいぶん進化したいる」ということをもっと強調しないとイケないと思う。加えて、飛散（農薬を浴びない）や臭いが少なくなれば、もっと農薬のイメージは向上するのにと、思う。残留問題とか環境問題には最早一定の安全は確保されているのであるから、農薬のイメージアップをもっと積極的に意図しながら技術確立や説明に当たっていくことが重要なのではないだろうか。農薬の理解促進には、様々な作戦が必要な気がする。

平成19年度農薬実証ほの概要について

平成19年度は、殺菌・殺虫剤35剤、除草剤14剤の合計49剤（作物、対象病害虫で55組み合わせ）を延べ90か所で実証し、普及性を評価しました。

1 評価の概要

実証の結果、普及性が高い、または、普及性があると評価された薬剤・処理法は、以下の表のとおりでした。

2 担当専門技術指導担当のコメント

(1) 普通作殺菌殺虫剤

水稻では紋枯病やフタオビコヤガに対する箱粒剤や、いもち病とカメムシ類の同時防除を目的とした粒剤などの効果が確認されました。大豆では殺虫剤の種子塗沫による防除効果が確認され、従来のは種時粒剤施用に替わる省力的な方法と期待されます。また殺虫粒剤による子実害虫防除効果が確認され、農薬飛散防止の観点から有益な情報が得られました。

薬剤名	作物名	病害虫名
農粒剤	水稻	いもち病、紋枯病
イモチエーススタークル粒剤	〃	穂いもち、ウカ・ヨコバイ類、カメムシ類
オリブライト1キロ粒剤	〃	紋枯病、穂枯れ
オリブライト250g	〃	紋枯病、穂枯れ
プリンスリンパー箱粒剤	〃	紋枯病
キラップフロアブル	〃	ウンカ、カメムシ類
パイゲットアドマイヤースピノ箱粒剤	〃	フタオビコヤガ
ルーバン粒剤	〃	初期害虫
マネージDF	大豆	紫斑病
クルーザーFS30	〃	アブラムシ、ネキリムシ、タネバエ類
スタークル顆粒水溶剤	〃	カメムシ類
スミチオンダコニール粉剤DL	〃	紫斑病、カムシ、マシクイガ
ダイアジン粒剤S	〃	マシクイガ

(2) 普通作除草剤

水稻では3成分剤を中心に、非SU剤などSU抵抗性雑草にも有効な一発剤や中期剤の効果が確認されました。また、乾田直播等において問題となるイボクサに対しては、体系処理の実証を通じて高い効果が確認されて解決に至りました。その他としては、水田畦畔の抑草剤や大麦ほ場周縁に対する除草剤の効果が確認され、状況に応じた活用が望まれます。

薬剤名	作物名	処理方法等
ヒエクレーンバサグラン粒剤	水稻	中期剤
クサビクワフロアブル	〃	水田畦畔
黒帯1キロ粒剤	〃	初中期一発剤
黒帯フロアブル	〃	初中期一発剤
カービー1キロ粒剤	〃	中期剤
ダブルスターSB1キロ粒剤	〃	初中期一発剤
ノミー液剤	〃	中後期剤
トップガンL250グラム	〃	直播・初中期一発剤
カルテット1キロ粒剤S1	〃	初中期一発剤
ダッシュワン1キロ粒剤	〃	初期剤
サムライフロアブル	〃	初期剤
ヨウワレジャンボ	〃	初中期一発剤
ブリグロックSL	大麦	ほ場周縁

(3) 野菜

近年、殺菌剤は耐性菌の出現から新規化合物による新剤や作用機作の異なる剤が、殺虫剤は新たな作用機作や残効性の長い剤、天敵や訪花昆虫等に対する高い安全性を持つ剤が増えていきます。また、環境保全型農業の普及により生物農薬を併用する場面も増加してきています。本

薬剤名	作物名	病害虫名
オンリーワンフロアブル	ねぎ	黒斑病
スコア顆粒水溶剤	きゅうり	うどんこ病
スコア顆粒水溶剤	いちご	うどんこ病
ランマンフロアブル	みょうが	根萎腐敗病
ランマンフロアブル	だいこん	白さび病・わつか症
ウララDF	いちご	アブラムシ類
ダントツ粒剤	れんこん	クワイビレアブラムシ
アクタラ粒剤	れんこん	クワイビレアブラムシ
ポトピカ水溶剤	いちご	うどんこ病
エシヨット	いちご	灰色かび病
エシヨット	トマト	灰色かび病・葉かび病
ダントツ水溶剤	れんこん	クワイビレアブラムシ
スタークル顆粒水溶剤	えだまめ	カメムシ類
アドバンテージS粒剤	ねぎ	ネギアザミウマ・ネギハモグリハエ

年度の実証において、いくつかの新規登録、登録拡大された剤の効果が確認され、普及性が確認されました。今後、IPM理念に基づいた効果的な防除体系の確立に向け、新規剤等の特徴を十分踏まえ、防除目的や時期、病害虫発生程度による散布薬剤の選択を産地等で明確にすることが必要かつ重要と思われます。

(4) 果樹

最近登録された農薬には、広範囲な病害虫に効果のあるもの、逆に限られた病害虫に卓効を示すもの、天敵生物に影響が少ないもの、さらには卓効はないものの環境に優しく対象病害虫が低密度の状態ですぐに効果が発揮されるもの等、剤の特徴は多様性が増えています。今回の実証剤の中にもこれらの特徴内容のもつ剤が検討され、それぞれその効果と特性が確認されました。果樹における薬剤防除は、無用な防除を慎み、土着天敵の保護を踏まえながら病害虫の発生実態に対応すべきであり、その際、農薬の特徴を十分理解した上で薬剤を選択することが一層大切になっています。

薬剤名	作物名	病害虫名
ナリアWDG	もも	灰星病
ナリアWDG	おうとう	灰星病・炭そ病
ナリアWDG	なし	輪紋病・黒斑病・黒星病
ピオネット	ぶどう	枝彫病・黒とう病
ストライド顆粒水溶剤	かき	炭そ病・落葉病
アミスター10フロアブル	いちじく	疫病
ドーシャスフロアブル	ぶどう	晩腐病
ウララDF	なし	アブラムシ類
マトリックフロアブル	もも	モモハモグリガ
フェニックス顆粒水溶剤	日本なし	リンゴコカクモンハマキ
モスビラン水溶剤	チェリーガ	アブラムシ類

(5) 花き

花きに対する適用農薬が少ない中で、花き類全般に適用のある農薬は生産場面において非常に重要ですが、各作物に対する防除効果や葉害の発生についての情報は少ない状況です。今回の実証によって、花き類に適用のある殺虫剤で、本県の主要品目であるチューリップに対する普及性が認められたことは、安定的な生産の振興を図る上で非常に有益と思われます。

(経営普及課 堀 武志)

ホームページ開設

当協会は、昭和57年度の発足以来25年間「公益社団法人」として活動を続けてきましたが、平成20年12月より施行されます公益法人制度改革にとまひ、さらなる公益性の追求と運営の透明性が求められることとなります。現在当会では、そのための諸準備を進めているところですが、その一環として平成20年2月1日よりホームページを開設して情報公開を図っています。

ホームページアドレス (URL) : //www.niigata-syokubou.or.jp/

主要事業や研修会等の開催案内のほか、「にいがた植防だより」のバックナンバーの閲覧も可能です。どうぞご覧下さいましてご意見等お寄せいただければ幸いです。

(事務局)